

																								関西現代俳句協会「京都吟行リモート句会」清記用紙					
																								俳句作品	作者				
28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No	
台風が来ると軒端の早終い	御所の秋カラス若くて突きあふ	新幹線顔十五種や京うらら	幕末の墓濃く淡く杜鵑草	猫じやらし都に先の大戦	北白川柿の上枝（ほつえ）へ再配達	秋声を蹴り上げ西京極の声	団栗の見える洛中洛外図	御所の月雲に七彩ありにけり	金閣の澄む池雪ののぼりくんだり	終バスや吾と満月乗せて発つ	柿落葉一枚で足る嵯峨便り	えび芋や三和土を仕切る竈神	御家元都のへそに菊薫る	原稿用紙に月光詰まる嵯峨の宿	鴨川の鴉陣取る薄紅葉	一夜にて色置く紅葉嵐山	やはらかく沈めるナイフ夜の桃	濁り酒頭のほろ苦き雀焼く	きのこ重なる道長の屋敷跡	秋灯宿の名浮かぶ京の路地	化野へ風に乗り継ぐ夕蜻蛉	化野の万の石仏星月夜	とことはの円周率に野霧立つ	鳥辺野は鳥のまなこの露の玉	鶏頭を辿ってゆきし中有かな	紅葉且つ散る京都嵐山線終点	渡り鳥立て看板の背の高く		

関西現代俳句協会「京都吟行リモート句会」清記用紙																															
俳句作品																												作者			
No	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56			
	時は今三日天下のひがん花	色ながら散るまつ白な祇王の死	秋風や出町柳のおにぎり屋	柴栗や応仁の乱の古戦場	碩学は深煎り好む暮の秋	レンタルの着物でぶらり薄紅葉	川霧や雲中菩薩舞ふ古刹	秋の香の溢れあふるる錦市場（にしき）かな	梁太き町家のフレンチ宵の秋	荒海や皿の華やぐ間人がに	赤文字の躍る立て看銀杏降る	秋雨や世界遺産の佇まい	善哉や東司の先の秋海棠	おかつぱの列をなしゆく曼珠沙華	路の音の紅葉しぐれとなる鞍馬	秋暑し鈍器の凹みつややかに	噂からかすかな波紋うろこ雲	夜久野ヶ原残る火口に草茂る	ねむい午後バスから彼岸花が見え	鯖街道是從り洛中猫じゃらし	渡月橋はさみて秋の虹淡し	円山のしだれ桜は天女なり	底冷ゆる奥行長き京の家	裸電球錦市場のマスク勢	こほろぎの見つめる気配仏彫る	萍の紅葉そよげり大覚寺	秋雨や芭蕉も踏みし石畳	鞍馬山幾度も崩れまた野分			

		関西現代俳句協会「京都吟行リモート句会」清記用紙																															
		俳句作品																															
		作者																															
		No	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82止					
			女子大へ続く坂道夜這星	哲学の道で秋思はやはり嘘	詩集閉づ銀漢の尾に鳴るハープ	かがよへる空のおはじき走り星	橋の上秋風匂う京五条	化野へ木の橋わたる秋の蝶	豆餅を食うて左京はしぐれかな	月ノ出ルアツチガマンガミュージアム	脇に抱く女結びの残り菊	哲学路さくらもみぢの落差かな	満月や天動説を疑わず	七転び八起きの朝の九条葱	京ことば車内に聴いて山紅葉	京都駅コートの君が降りて来る	紅葉狩ゴーツー京都に乗せられやうか	牛祭見知らぬ神の面薄し	新涼や舞子習いの束ね髪	石榴持つブラック・ライブズ・マターかな	落柿舎は小さき庵秋高し	生きるのも死ぬのも大事柿を食う	立ち飲みは六角下ルぐじのあら	林檎剥くパティシエ路地の町家カフェ	町筋の上ガル下ガルを秋の風	秋の蚊に残されている詩人かな	稲光り龍はつぶやく京の古寺	法堂の鳴龍の眼や秋気澄む					